炊き出し活動を通して考える社会的孤立について

釜ヶ崎（あいりん地区）はどんなところか？

釜ヶ崎（あいりん地区）は大阪・新今宮駅の南側に位置し、戦後から日雇い労働者が集まって形成された地域である。現在は高齢の単身男性を中心に生活困窮者が多く、NPOや教会が炊き出し・医療・生活支援を行う福祉支援の拠点となっている。地域には助け合いの文化がある一方、貧困や偏見（汚い、危ない場所などと言われる）といった課題も抱えている。

活動前の印象

- 「ホームレス＝怖い」という印象を持っていた
- 社会問題（ホームレス問題）は自分とは関係のない遠いものだと思っていた。

私たちが行った活動内容

① フィールドワーク：釜ヶ崎がどんなところか、どんな人たちがいるかを知るためにフィールドワークを実施
② 夏祭りボランティアに参加：釜ヶ崎でお盆期間に開催される夏祭りボランティアに参加して炊き出し活動のお手伝い（調理の準備として野菜を切る作業をサポート）
③ 毎週土曜日に炊き出し活動をしている団体でのお手伝い：パンの配布、食事の提供サポート、調理で使った鍋や道具を洗ったり、片づけたりした
④ 夜回り活動：夜間、路上で寝ている人に声掛けし、パンとホッカイロを提供（5人の方々に支援）

活動の様子

活動中に感じたこと

- 炊き出しボランティアに参加して、とても心に残る経験があった。食べ物を配っているとき、多くの人が「ありがとう」と笑顔で言ってくれた。自分の小さな行動でも、人の役に立つことができると感じた。
- 短い時間でも人との関わりの温かさを感じ、自分の行動が誰かの支えになることを実感した。初めての活動で不安もあったが、仲間と役割を分担して作業を進めることでミスを減らし、落ち着いて対応できるようになった。
- また、日本のボランティアのチームワークの良さにも驚いた。みんなが協力して、早く準備をしていた。留学生として、この活動を通して、炊き出しをする側もつながりの大切さを学ぶことができた。

一方で・・・

- 街並みが全体的に暗い印象を受けた。
- 活動前の印象通りのこと（炊き出しを受け取る列に並ぶときに自分が優先しようとしたり喧嘩が始まったりする、清潔さが確保されていないなど）も確認された。

活動中に伺った話（貧困ビジネスについて）

貧困ビジネスとは、生活保護の受給者などをターゲットに不当な利益を得る悪質なビジネス。
①住まいがない人に対して、「生活保護の申請を手伝う」などと誘う
②劣悪な環境のドヤを提供する　・・・　住所がないと生活保護が受給できないため
③住環境に到底見合わない高額の利用料を搾取　・・・　受給者本人の手元にはわずかなお金しか残らない
④生活保護を受給するために貧困から抜け出せないという悪循環が生まれる

活動をとおして学んだこと

- ホームレスの人たちに食事を配っている様子を見て、社会福祉のような支援活動は、心身ともに大変だとは思うが、とても素晴らしい仕事だと感じた。
- 相手の立場を考えて行動する力や、協力して課題を解決する姿勢をさらに磨くことが必要だと思った。
- この活動で、人を助けるときは「特別な力」よりも「気づき」や「気持ち」が大事だと知った。これからは、周りで困っている人に気づける人になりたいし、小さなことでも行動していきたい。将来はボランティアや地域活動にも積極的に参加したいと思っている。日本だけでなく自分の国でも、社会問題に関心を持って行動し、他者を支える活動を続けたい。
- この経験を通して、困っている人を見かけたときに声をかけたり、小さな行動を起こす勇気を持てるようになった。自分ができることは小さくても、その一歩がとても大切だと感じ、社会に対しての考え方が前向きに変わったと思う。